

第4章 行事

敬老の日

父と母が、満九十五歳(平成二十二年)になりました。大正四年生まれです。今年は「敬老の日」のプレゼントに時計屋で腕時計を買いました。二人とも大喜びでした。時計屋の主人がニコニコ顔で「電池を新品にしたので、四年間は動きますよ」と言っただ。商売で言った四年という言葉がズンと重かった。

この話を童謡の会ですると、「いいですね。うらやましいですね」と言う人があった。「うらやましい？」私は思いがけない言葉に驚いた。そして、「優しい人だなあ」と思った。そうです。いくつになっても親がいると安心があります。

「敬老の日」は、若い人が高齢の人に「ありがとう」を言う日です。「今の世の中を作ってくれて、ありがとう」と、私も言いたい。昔は、みんなが貧しい生活をしていた。しかし、今は、みんなが同じ水準で幸せです。普通の幸せがあります。それが大部分の家庭にあります。ありがたいことです。私は今の世の中が、とても良いと思っています。

「敬老の日」は、高齢者が若い人に「ありがとう」を言う日でもあります。高齢者の生活は、若い人に支えられています。子供や孫、介護の人々に支えられ生きていられるのです。高齢者の中には「長生きをして何になる」と言う人がありますが、手本になるのです。若い人は、高齢者を手本にして生きています。私の父や母が長生きをしているのを見て、孫たちは「頑張っているなあ」と励まされています。子供である私も自分の生活を反省し、明日への活力としています。みんなが見守っています。だから高齢者は安易な生活はできない。

クリスマス

日本では、クリスマスにどこの家でもケーキを食べます。子供たちは親からプレゼントをもらうのが定番になっています。「サンタクロース」からプレゼントをもらうと思いついている子供も少なくありません。子供には楽しい夢があります。それは否定しません。

私は、「クリスマスはボランティアをする日」と決めています。保育園、幼稚園、病院、老人介護施設で、童謡を歌うボランティアをします。童謡の歌声を贈るのです。もちろん私が主宰する童謡の会員も一緒です。

クリスマスは、「人のために尽くすことを伝える日」にしたいものです。クリスマスの本当の意味を、大人から子供へ伝えていきたいと願っています。

病院のクリスマス

ある年のクリスマスイブ、小田原市立病院の小児科でクリスマス会のボランティアをしました。小児病棟は十五歳までの子供が、親から離れて一人で入院している。

子供たちのほとんどが点滴をしながら集まって来ました。中には車椅子で、ベッドに寝たまま、看護婦さんに抱かれて、みんなが集まって来ました。病人だから元気がない。女の子も男の子も可愛い絵柄のパジャマを着ている。親の思いがこもったパジャマです。

ナースキャップをかぶった看護婦さんたちに、キャンドルを持ってもらい、『きよしこのよる』の歌を歌いながら登場してもらいました。「きれい!!」「すてき!」子供たちの口から感激の言葉が出ました。その美しさは感動でした。

続いてクリスマスの歌『赤鼻のトナカイ』や『ジングルベル』を、みんなで歌いました。それに子供たちの好きな『となりのトトロ』『さんぽ』『エーデルワイス』など

も歌った。カスタネットやスズ、タンバリンも用意してあったが、みんなが点滴をしていたので、手拍子もできなかった。得意とする「手遊び歌」はやれなかった。手が使えないのは想定外だった。

最後に「サンタクロースが来てくれているので、みんなで呼んでみましょう」と言いました。「サンタさーん、来て下さーい」子供たちが呼ぶと、サンタクロースが登場しました。「ワーイ！」みんなの顔が笑顔になりました。普通の子供の顔です。病気を忘れたかのようです。

「メリークリスマス。はい、どうぞ」、「はい、どうぞ」と、プレゼントが一人一人に手渡されました。ところが、それまで一番前で正座をして見ていた三歳ぐらいの男の子がワンワン泣き出しました。涙が滝のように流れ、顔が真っ赤です。見た事もないサンタクロースの姿が怖かったのです。泣きじゃくる細いその男の子を看護婦さんが抱きしめました。

サンタクロースが子供たちの中に入っていくと、大きい子が「先生だ。サンタじゃあない」という声も上がりました。若いサンタクロースはテレやさんで、プレゼントを配ると、そそくさと帰ってしまいました。もっと子供たちに何かしたり、言ったりしてくれるとよかったのにも思いました。それでも子供たちはプレゼントをかかえて、「サンタさーん、また来てねー」、「サンタさーん、ありがとう」、「サンタさーん、さようなら、さようなら」と手をふりました。自分が座っていた椅子の上に立っている子もいました。みんながサンタクロースに酔いしれた一瞬でした。私は子供たちが大喜びをしてくれたのでよかったと思いました。ボランティアをしてよかったと思えました。

ところで、子供たちが大喜びをしたサンタクロースは、小児病棟の先生にお願いし

ました。あとで聞いた話ですが、先生方は、いやがったそうで、頼んでおいた先生は帰ってしまったようです。急きょ、その若い先生がサンタの役をしたのだそうです。でも、子供たちが大喜びをしたので、よかったです。

ずっと後になって、童謡の会で、この時のクリスマス会の話をする、会員から、「ウチの子も、その時いたんですよ。喜んでいました」と言われました。世間は、広いようで狭いと思いました。

しかし、好い事ばかりではありません。次の年のクリスマスにボランティアで病院に行くと、同じ子供が入院していたのです。その子は二度目なので看護婦さんたちの中に入ってキャンドルサービスに参加してくれていました。ロウソクを持ってうれしそうでしたが、その後を心配しました。退院したでしょうか。元気になっているでしょうか。

同じ頃、小田原市立病院のロビーでは、市内の女声合唱団がクリスマスコンサートを開催していました。それは、翌日の神奈川新聞に大きく報道されていました。

年賀状

年賀状ほどおかしな物はありません。まだ新年でもないのに、暮の忙しい時に、「のんびりとした元旦の気持ちになって、今年の抱負を書き連ねて」ポストに投函します。それは小学校の国語の時間に、「遠足にまだ行っていないのに、行ったつもりになって作文を書く」のに似ています。指導に当たっている先生の中には、新しい試みと思っている人があるようですが、すでに昔から年賀状で行なわれていることです。

私の場合、小学校の頃は親のまねをして年賀状を書いて出していましたが、ある年、ポストに投函した年賀状が、暮の内に相手に届いてしまい笑われた事がありました。

それ以来、年賀状は自分からは、書かなくなりました。

しかし、五十歳を過ぎると、仕事柄、毎年沢山の年賀状が来るようになり、正月に返事を書くだけでなく、暮に年賀状を書くようになりました。年賀葉書は千枚買います。書くようになった理由はいくつもあります。

まず、相手から来る年賀状は、絵手紙や版画、写真入、毛筆など個性的で工夫があります。しだいに元日にもらう年賀状が楽しみになりました。自分も楽譜の入った年賀状を作るようになりました。

中学の恩師からは毎年返事を書かなくても来ています。私の事を心配してくださっているからです。先生は退職され、世界を旅行して元気にされていることが年賀状でわかります。

父と母は、小学校の教師をしていましたが、九十歳を過ぎた今(平成十七年)も曽我国民学校、松田小学校、富水小学校、酒匂小学校の時の教え子から年賀状が来ます。心を込めて「元気にしています」と返事を代筆します。元気である事を伝えられる年賀状ほど嬉しいものはありません。

夫は暮に毎年欠かさず年賀状を書いています。特に、高齢の人には、必ず書くようにしているそうです。ある年の暮れ、「年賀状は、めんどうだから書かない」と言う私に「友だちを失いますよ」と言いました。その一言に動かされ、急いで年賀葉書を買に行きました。翌年からは、私も友人、知人、お世話になった人に年賀状を書くようになりました。

高齢になったからという理由で年賀状を書くのをやめてしまう人がありますが、年賀状は元気に暮らしている事を確かめ合うものです。健康で年賀状が書ける事は幸せな事なのです。クリスマスケーキを食べながら年賀状の文面を考え、師走の町のポス

トに年賀状を出しに行くのが日本の文化です。

年越し

日本ほど平和な年越しはありません。暮には国民の多くのひとが家族そろってNHKテレビ『紅白歌合戦』を観ます。終わると『ゆく年くる年』という番組に切り替わります。全国の寺や神社の参拝風景です。山形や長野では大雪なのに、大勢が出かけて行き寺の鐘を鳴らし祈ります。「今年こそ良い年になりますように」と祈ります。

続いて長崎や広島からは教会での祈りの風景が放送されます。「核兵器のない平和な世界へ」と祈ります。寺や神社や教会がテレビ画面に次々映り、さまざまな祈りを放送します。日本ではそれが日常なので違和感がありません。

宗教で戦争をしている国があるというのに、あらゆる宗教が共存している日本は、のんきなものです。各宗教団体や、宗教を持たない人々から放送を中止しようとする動きなど全くありません。日本人が穏やかな人種というより、教育の成果でしょう。それとも、身をこがすような深い信仰がないためでしょうか。私は「不思議な現象だ」と思ってテレビを見て年越しをします。

バレンタイン

小田急線の小田原駅から電車に乗ると、女子高校生の二人連れの会話が耳に入ってきた。

「バレンタインのチョコを百個もらった先生がいたんだって」「それって、私も聞いたよ。すごいね。」その伝説の先生は、今や娘からしかチョコをもらえなくなった夫です。百個とは大げさだが、結婚前は、確かにすごい人気だった。「先生は、人気商売ではない」と言いつつもうれしそうでした。GパンにリーのTシャツを着たその人は、生徒

の事を一番に考えている先生でした。

下宿に行ってみると、本棚にチョコレートが積んでありました。後日、「あのチョコはどうなったの？」と尋ねると、「他人にあげたり、自分で食べたりした」と言っていました。毎年バレンタインデーが来ると、思い出される事です。

女子高生に人気があった先生は、背が高く、ハンサムで、テレビドラマのヒーローのように見えた。たとえば、NHK朝の連続ドラマの『都の風』の村上弘明。しかし今は、かんろくがついて、レスリングのアニマル浜口に近づいている。

引っ越し

昔、わが家の周りには一軒も家がありませんでした。ある日突然、北側に三階建てのアパートが三棟建ちました。すると、北側の風景が一変しました。それまでは、二階から松田山にかかる虹を見ながら食事ができたのに、今は晴天になると布団を叩く音があちらからも、こちらからも聞こえてきます。一体何人の人が住んでいるのでしょうか。どんな人が住んでいるのでしょうか。出入り口で顔を合わせても、当然のように挨拶をしません。

続いて西側に六軒、東側に三軒、そして南側に四軒、新しい家が建った。挨拶がないので、だれが住んでいるのかわかりません。こちらから挨拶に行くのも変です。夜は灯りがともり、静かな暮らしがあります。

朝の連続ドラマ『ゲゲゲの女房』（漫画家・水木しげるの妻、武良布枝の原作）で、奥さんが「ご近所の挨拶回りはどうしましょうか」と水木しげるに尋ねるシーンがあった。どうするかなと観ていると、「それぞれに生活しちやられるから、まあ、いいでしょう」と答えていた。それは、戦後すぐの貧しい貸本漫画家時代の新婚生活のスタ

ートでした。今なら、まんじゅうの菓子折りを持って、「隣に引越してまいりました水木でございます。これから、お付き合い、どうぞよろしく」と挨拶されと思います。『ゲゲゲの女房』なら、きっとそうだと思います。

新婚生活

私たちは、昭和五十一年春、見合い結婚をしました。父が「北海道の青空のような好青年だ」と大喜びをしたので結婚が決まったようなものです。父は北海道に行ったことがなかったのですが。

その夜、昔話をしているうちに、夫が「山形市立第八小学校 新入生を迎える歌」を歌い出しました。

川原のつんこも 花咲いた

お庭の芝生も 芽を出して

かわいい みんなを 待っていた 待っていた

一年生よ おめでとう

歌い終わると説明がありました。「この『つんこ』というのは、『ツクシ』のことなんだよ。ツクシが花咲いたというのは奇妙です。ツクシは花が咲きませんからね」と。私は、よく音楽大学を卒業している奥さんの前で歌えるなあと、あきれて聴きました。その後も時々「あれ歌ってよ」と、ふざけて言うと、まじめに歌ってくれます。『つんこ』の説明も必ずあります。こうして、奇妙な新婚生活が始まりました。

結婚記念日

三月二十八日は、結婚記念日です。この中途半端で覚えにくい月日は簡単に決まっ

た。夫が「結婚式は、春休みの、この日以外は時間が取れません。この日がダメなら、夏休みになってしまいます。どうしますか」と言ったためです。それで早川の海のそばの神社で結婚式をあげました。神主さんは、父の鎌倉師範の時の同級生。成績優秀者だったそうです。急な話だったので、出席者は仲人さんと、父だけで、夫は新調の水色の背広、私は白のワンピースでした。夫が「指輪は、どうしますか」と聞いたので、「指輪をしているとピアノが弾けないのでいりません」と答えると、指輪の話はそれで終わりました。後々もったいないことをしたと、悔やんでも取り返しがつきませんでした。

ある時、散歩のついでにケーキを買った。ケーキを見て「今日は何ですか」と夫が聞いた。「結婚記念日です。あの日は桜が満開でしたが、今年は、まだですね」と言うと、夫は「そうでしたか」と平然と言った。夫は結婚記念日を忘れていた。

私がケーキを食べながら、「これからも、どうぞよろしく。これ以上、太らないように注意します」と言うと、「ボクは、何も気にしていないよ。風船のようにポンポンに膨らんだっていいんだよ」と、また平然と言った。その言い方は、私をバカにしているでも、からかっているようでもなかった。いつも、たんたんとしている。夫も太った。三十年前は、ほっそりと背の高い人だったのに、今ではレスリングの“力道山”のように、かんろくがついている。

花冷えのする平凡な一日でした。インターネットで、太宰治の短編『きりぎりす』を読んで寝た。最後に、「こおろぎ」が鳴くシーンがあった。

京都旅行

春休み、京都には何度も家族で旅行をした。京都大学の近くには金閣寺があった。

行った時は勉強不足で、金閣寺の由来など知らなかった。清水寺、三十三間堂も、観て楽しかった。豆腐鍋も味わった。

京都と言えば東映の太秦映画村。橋を渡ると時代劇そのままの家並みがあった。ぶらぶら中をのぞいて歩いているうちに、貸衣装のコーナーがあった。子供たちは何に扮装するか真剣に考えた。二人とも舞妓さんの姿になり写真を撮ってもらった。かわいい舞妓さんの写真は、今でも大切にしている。

貸衣装のコーナーは観光客で、ごった返していた。侍、旅人、忍者。扮装は、なんでもあった。白無垢の婚礼衣装もあったので、「そうだ、お父さんと一緒に婚礼の写真を撮ろう」と考えて、その場に並んだ。しかし、前の人のお鬘が脱げなくなり大騒ぎになった。外そうとしたが、その人が「痛い、痛い!!」と叫ぶので時間がかかっているうちに、お父さんがいなくなった。娘たちと捜したが結局いなかった。婚礼の写真撮影は、あきらめた。

お父さんは、雨にぬれて出口に立っていた。羽織袴を着せられ、娘たちに見られて婚礼の写真を撮りたくなかったのだ。恥ずかしかつたのだと思った。時々思い出しては「あの時、逃げたでしょう」と聞くが、「なんのことかな」とか「全然覚えていない」「そうでしたか」などと平気で言う。

今日、昼のテレビ番組で太秦映画村が話題になっていた。「私が白無垢で、あなたと結婚式の写真を撮ろうとしたら、逃げたのよね」と言うと、「貸衣装のコーナーなんて、ありましたか。気がつきませんでした」と平気で言った。楽しかった家族旅行も、忘れていてのではないかと心配です。

シニア

近所のマーケットで「シニア会員証」をもらいました。チラシには「毎月5のつく日は、六十歳以上のお客様に限り、5パーセント割引いたします」と書いてあります。

「お、六十歳以上か」と嬉しくなりました。早速、用紙に書き込みをしてサービスカウンターに持って行きました。すぐカードがもらえました。私が、「いいけど、やだねえ」と、地元の方言で言うと、店員さんが「いいんですよ。5のつく日に買いに来て下さい」とニコリしました。「温かいなあ。年寄りになると、こんなに優しく扱ってもらえるのか」と感動しました。

中学校の国語の先生に手紙を出しました。「先生お元気ですか。私は平成二十三年(2011年)四月、六十歳になりました。毎年、おだわらシルバー大学の講師に選ばれていますが、生徒の方が若くなりました。おだわらシルバー大学は、おおむね五十八歳以上の方が対象です。私は、童謡や唱歌の解説を交えた歌唱指導をしています。まずは楽しく歌う事を一番に心がけています。」

小田原を直撃する予定だった台風が、四国に上陸した。薄曇りの日、隣町のマーケットに自転車で買い物に行きました。

レジを終わって商品を袋に詰めていると、店員が声をかけて来ました。「失礼ですが、六十歳以上の方ですか。只今、しあわせカメさん運動をしています。毎月「6」のつく日は、しあわせカメさんの日で、お買い物が高で一割引きになります」「はい、そうです。会員手帳は持っていません。お願いします」「では、説明します。通常一冊五百円ですが、今はキャンペーン中なので二百五十円です。この用紙に書き込んで下さい。確認ができました。明後日の火曜日が6日ですので使えます。これは一年間使えます。」会員手帳(総額一万円の割引券が付いている。百円が七十枚、五十円が六十枚)

をもらった。

帰りがけに「私を見て、なぜ六十歳とわかったのですか?」と、声をかけて来た店員さんに聞きたい気分になったが、その店員さんは、他のおじいさんと、おばあさんに声をかけて断られていた。必死だったので、そのままとなった。キャンペーン中でノルマがあるのだろう。

外に出ると、曇り空から一転して猛烈な風雨でした。横なぐりの雨がアスファルトを叩いています。ぐっしょり濡れて家に着くと、午後からはカンカン照りの猛暑となりました。

元気を出すために歌を歌いました。「そのふねを、こいでゆけ」。もうすぐ平成二十三年九月十九日、敬老の日が来ます。私には、「老人」という感覚が全然ない。

宙船(そらふね)

作詞・作曲 中島みゆき、歌・TOKIO

その船を漕いでゆけ

おまえの手で漕いでゆけ

おまえが消えて喜ぶ者に

おまえのオールをまかせるな

祝日

今日は、カレンダーの日付が赤かったので何だろうと思った。「勤労感謝の日」だった。

昔は、「旗日」といって玄関に「日の丸の旗」を立てた。どこの家にも旗があった。旗の棒の先には金色の球を付けた。球は、取り外しができた。私の家にあった旗は、

しまっておくうちに虫が食ってボロボロとなり、新しい旗を買う事がないまま今日にいたっている。

今は、「旗日」という言葉を聞かなくなった。玄関に「日の丸の旗」を立てる家は珍しい。一般的に、どこの家にも旗はない。わが家も旗を持っていない。神奈中バスが旗を立てて走って来るのを見ると違和感がある。

テレビニュースで外国のデモ隊が国旗に火を付けて焼いたり、サッカーの試合の後、ファンが相手の国旗に唾をかけたり踏みにじったりしているのを見ると野蛮だと思う。日本ではありえない。なぜ、ありえないのだろう。教育や治安の問題だけではなさそうです。多くの国民が、国旗に関心を示していないのが、一番の理由に思えます。国旗に関心を示さなくていいほど今の日本は平和です。

この日、朝七時の一番のニュースは、落語家・立川談志が癌で死亡したニュースでした。政治や経済のニュースより先に放送されたのは、日本が平和だからにほかならない。私は、よい事だと思っている。